2019 明治安田生命 J2 リーグ 第 22 節 vs. ジェフ千葉

7/14（日）18:00 kick off　@岐阜メモリアルセンター長良川競技場

2019J2■順位表■第21節

勝点、得失点差、得点、失点、岐阜戦の戦績（岐阜から視て）

1	山形	40p	+11	24	13	H○
2	京都	37p	+10	30	20	H△
3	柏	37p	+8	22	14	A●
4	水戸	36p	+10	24	14	H●
5	大宮	36p	+8	25	17	A●
6	甲府	33p	+10	33	23	A●
7	金沢	31p	+10	26	16	H●
8	長崎	31p	+4	29	25	H●
9	徳島	31p	+2	23	21	A●
10	岡山	31p	−1	26	27	H○
11	新潟	29p	+5	31	26	H●
12	横浜FC	29p	+3	29	26	A●
13	琉球	28p	+2	32	30	H○
14	東京Ｖ	28p	−1	28	29	H●
15	山口	26p	+1	34	33	A●
16	町田	25p	−10	20	30	H●
17	愛媛	23p	−6	18	24	A●
18	千葉	23p	−9	22	31	A●
19	鹿児島	20p	−7	20	27	H△
20	栃木	17p	−14	15	29	A△
21	福岡	17p	−15	20	35	A○
22	岐阜	15p	−21	18	39	--- ---

次回HomeGame

第25節 vs.大宮アルディージャ
7/31（水）19:00【平日開催です!!】
@岐阜メモリアルセンター
長良川競技場

大酒泉場 ホームラン
名鉄岐阜駅前（三菱UFJ銀行隣り）
年中無休　午後３時から営業
TEL.058-263-5201

Living in Woods
本庄工業株式会社
http://www.honjo-woodream.com/

「いらっしゃいませ」より
「おかえりなさい」が似合う
アットホームな韓国料理店。
『チヂミ屋』は
JR岐阜・名鉄岐阜駅から徒歩３分。
休：月曜日

today's guest：ジェフ千葉

2018 J2 16勝７分19敗　勝ち点55：14位

直近の対決と結果

2019/05/19
J2 - 14節＠フクアリ

千葉 5-1 岐阜
ライアン・デ・フリース
scored.

ここ３試合の公式戦の結果

FC岐阜	ジェフ千葉
2019/07/06　J2 - 21節＠レベスタ 福岡 1-3 岐阜	2019/07/07　J2 - 21節＠鳴門大塚 徳島 1-1 千葉
2019/07/03　天皇杯＠中銀スタ 甲府 2(pen.)-2 岐阜	2019/07/03　天皇杯＠フクアリ 千葉 0-3 岡山
2019/06/30　J2 - 20節＠長良川 岐阜 1-2 東京Ｖ	2019/06/29　J2 - 20節＠フクアリ 千葉 1-2 町田

●北野監督体制となり、苦しみながらも戦い続けるＦＣ岐阜。6/30（日）第 20 節・ホームでの東京Ｖ戦は、＃９山岸祐也のゴールで 16 試合ぶりに岐阜が先制点を奪うが、前半終了直前にＰＫを与えてしまい、同点にされてしまう。後半は東京Ｖの猛攻に対して、分厚い守備で耐える岐阜だったが、終盤にボールを押し込まれてしまい、逆転負け。北野監督ホーム初戦を飾ることは出来なかった。そして、中２日で迎えた天皇杯２回戦・アウェイ甲府戦。２度、甲府に先行された岐阜だったが、２度とも＃17 藤谷匠のゴールで追いつき、延長戦を戦っても決着がつかず、ＰＫ戦で惜しくも敗れ、３回戦進出は果たせなかった。そして再び中２日で迎えた 7/6（土）第 21 節・アウェイ福岡戦。さらに戦術の整備を図ったＦＣ岐阜は、前半 10 分に＃５川西翔太のスーパーミドルで先制、23 分にも＃11 前田遼一の追加点で突き放す。後半になると福岡の逆襲に耐える時間帯が多くなり、ついに後半アディショナルタイムに１点を許してしまうが、攻勢をかけた福岡に対してカウンターで＃５川西翔太が３点目を奪い、勝負あり。３－１でＦＣ岐阜が北野監督体制初勝利、連敗を８で止め、残留争い直接対決を制する、貴重な勝利を手に入れた。

暗く長いトンネルを、ようやく抜けることができたＦＣ岐阜。残念ながら、2019 シーズン前半戦を終えての成績は、４勝３分 14 敗・18 得点 39 失点で最下位だ。しかし、福岡戦で勝利したことで、20 位・栃木及び 21 位福岡との勝ち点差は２に縮まった。19 位・鹿児島との勝ち点差も５だ。そして、これからシーズン後半戦が始まる。残りは 21 試合。全チームとの対戦を終えてはいるが、我々も北野監督体制になってサッカーが変わったように、体制が変わり全く違うチームになった相手もいる。北野サッカーも研究され、対策がとられるだろう。そして何より、我々はまだ最下位であり、Ｊ３降格圏を抜け出せていない。簡単な試合は１つもないだろう。毎試合、挑戦者として最後まで全力で戦い抜いて、勝ち点を、そして勝利を積み上げていくしかない。

さて、シーズン後半戦最初の対戦相手となるはジェフユナイテッド千葉だ。昨年はクラブ史上最下位となる 14 位に終わり、10 シーズン目のＪ２を迎える “オリジナル 10” は、第４節を終えて未勝利だったエスナイデル監督との契約解除を発表し、江尻篤彦監督体制に移行。しかし、その後もチームは 17 試合で５勝６分６敗・18 得点 21 失点と劇的には復調せず、現在は 18 位。とはいえ、現時点の岐阜との勝ち点差は８。岐阜より戦績が優れているし、順位も上だ。厳しい対戦相手であることに変わりはない。

千葉とのリーグ戦での通算対戦成績は、岐阜が６勝３分 10 敗・23 得点 34 失点と負け越しているが、ホーム戦では３勝２分４敗・10 点 13 失点と五分に近い成績だ。今シーズン前半戦では、5/19（日）第 14 節・アウェイ戦で１－５と今季最多失点での大敗を喫しているが、昨年のホーム戦・10/28（日）第 39 節では２－０で勝利を収めている。その３得点はすべて＃10 ライアン。今節も、彼のゴールで千葉に勝利し、北野監督体制ホーム初勝利そして今季初の連勝を挙げたいところだ。

千葉の最も注意すべき選手には、現在９ゴールを挙げている＃10 船山貴之を挙げる。直近５試合でも３ゴール、前回の対戦では２ゴールを与えてしまった。また、５ゴールの長身ＦＷ＃９クレーベにも要注意だ。したがって、岐阜の守備陣形が、彼らに仕事をさせないように機能するかどうかが勝負の重要なポイントだ。北野監督の采配と、それに応える選手たちの活躍に期待したい。

８試合ぶりに勝利を挙げたＦＣ岐阜。シーズン後半戦に向けて明るい材料ではあるが、楽観視はできない。これからもシーズンが終わるまで毎試合、勝利を目指してひたむきに全力で戦っていかなくてはならない。それに、僕らは北野監督体制でのホーム戦勝利を手にしていない。今節もまた、最後まで走り続ける選手たちの背中を後押しするため、拍手や声援を最後まで送りつづけよう。そしてホーム長良川で、歓喜の万歳四唱を選手たちと分かち合おう。僕らの反撃の狼煙を上げようじゃないか。（ささたく）

投稿募集！！ gidaidohri@gmail.com

【第 20 節】岐阜 1-2 東京Ｖ

●北野監督初采配となった、アウェイ山口戦は０－４での惨敗。ほぼ、何もできなかったと言っても良いだろう。しかし、監督就任からわずか３日の準備期間しかなかったので仕方ないところ。このホーム東京Ｖ戦が北野監督の“初戦”と言ってもいい試合。しかし、今まで２年半続けてきた大木サッカーを１週間でどれぐらい修正できるのか…期待と不安が入り混じりながらの参戦。さて、スタメンは…えーと、４バックというと、普通はＳＢが上下動して攻撃参加するイメージなんですが、この４人ですと“４センターバック”って言うんじゃないでしょうか（苦笑）。北野監督が、本格的に守備の立て直しに着手したってことなんだろうなあ、でも、まだ１週間だよなぁ……と試合前には思っていた。
ところが、だ。正直、僕は驚いた。「おいおいおい、守備陣形が全然違うじゃんか！」讃岐での北野監督は「守備の名手」（一部のサポは“塹壕戦”とも言う）と呼ばれていたが、その守備戦術の構築にはもう少し時間がかかるものと思っていた。だけど、ヴェルディ相手にしっかりと、意図を持った守備戦術が機能している。ただし、その代償として（？）ボールを奪ってからの攻撃への切り替えは全く機能していない（苦笑）。今までとは選手の距離感が全く違うからだと思うんだけど、味方がいるはずと思って出したボールがなかなか繋がらない。それでも、前半 29 分に＃10 ライザがボックス内でボールを奪い、中央にフワリと上げたボールに走り込んだ＃９山岸祐也がヘッドで押し込んで先制ゴール！「おいおいおい、先制点って何試合ぶりだよ！」（笑）。このまま前半を無失点で終われれば…と願っていたが、自陣ＰＡ内で＃31 宮本航汰が相手選手を倒してしまい、ＰＫ。怪我から復帰初戦のため、まだ試合勘が戻っていないのかも…。そのＰＫは＃25 ビクトルの手も届かず、同点のまま前半終了。そして、後半はヴェルディの攻撃圧力がさらに強まってくる。岐阜に対して効果的な突破ができないとわかってくると、クロスを上げて中央で勝負する形にシフト。これを、身体を張ってゴールを死守する岐阜の選手たち。そして、カウンターに行ける場面でも、最後まで走りきるために、これ以上失点しないために、あえて無理にはカウンターにいかないのだと、少なくとも僕には思える場面が何度かあった。だけど、カウンターが機能しないから、ひたすら相手の攻撃に耐える時間が続き、選手たちが消耗していく。１週間でそれほどフィジカルが鍛えられたとも思えない。この相手のクロスの“砲火”に、“塹壕”に籠もった岐阜の選手たちがいつまで耐え続けることができるのか…これが、勝ち点を獲るために選択した“リアリスト”北野監督のサッカーなのか…今までとは真逆のサッカー。華麗なパスワークなんて見る影もない（苦笑）けれど、“勝つためのサッカー”に、僕は心打たれていた。これで奇跡のカウンターが決まって勝利、あるいは引き分けたら良かったのだけど、やはり勝負は甘くない。＃26 咸泳俊が負傷してピッチを離れ、１人欠けた状態で守備が緩んだ隙を突かれ、押し込まれて逆転されてしまう。本当に悔しい、残念な逆転負け。でも、まだ北野監督になって２試合。そして、少なくとも僕には悪い試合には見えなかったし、このチームの“伸びしろ”が感じられた試合だった。（ささたく）
●正直な感想を述べると「今出来ることをやった。今出来ることはやった。」とでも申しましょうか。そして、負けた。あるいは、でも負けた……かな？現状ではＳＢ不在なんだからＣＢ四枚並べて蓋をしたらどうか？で、四枚ともほぼ守備専にして、その分広く空いている両サイドにはミシャとかフレドに好きにやらせてみたら？という妄想も描いていたんだけど、さらに斜め上をやるのが北野サン。川西をスタメンで使って左サイドにするのはいいけれど、ほとんどがワイドに張りっぱなし、なのに東京のチーム内得点王・小池のマンマーク。ほぼ、５バックとかになってて、実に見事な引きこもり。その上、ある程度サイドは目を瞑って中央勝負。うん、まぁ、その勝負もギャンブルだったことには目を瞑ろう、うん。ただ、慣れないサイドでのマンマークと上下動を繰り返し、精力的に好機の芽を摘み取っていた川西を前半で交替させる北野誠。ある意味、勝負師。だが、川西がいなくなったら、小池がフリーになるのは当たり前。ギリギリのアップアップながら、なんとか堪えてたけど、ヨンジュンだったかな？脚がつってピッチ外でケアしてる間に決勝点。数的不利な状況で、しかも足りなくなったウチの左サイド。キックオフから一番ケアしていたサイドからの決勝点。もう、天を仰がざるを得なかった。アソコをガマンし切ったら勝ち点、と思ってたんだけどね。川西のいなくなったサイドからヤラレタのは本当に皮肉な話だ。試合後の挨拶に来た時、一礼するかしないかのうちに踵を返すようにして歩き出した川西を見て「そりゃ、納得いかないよなぁ。」と思った次第。いろいろ心配してしまうなぁ。大木さんの時はなかなか出場の機会がなかったけれど、実績、実力はウチの中でも前田神に次ぐ選手……と思っている。彼の活かし方がウチの浮沈のカギ。そう思うのはボクだけかしらん？
さて、次節はいよいよ今季の折り返し。その前に天皇杯。連続のアウェイにはなるけれど、一昨年の山形遠征に比べたら、はるかにマシな日程だろう。ここ数年は夏場以降に調子を落とす我がクラブ。次節がブービーの福岡戦。裏天王山の６ポイント・マッチとなるワケだから、この際天皇杯は貴重な実戦練習にしてもいい。あるいはターンオーバーでもいい。北野さんのサッカーを少しでも早く落とし込んでもらえないかな？そして、願わくば、90 分での決着で（笑）。（ぐん、）
●評価が分かれる試合だろうなあ……と思ったんだけど、ネットで岐阜サポさん達の情報（ＳＮＳでの書き込み）をいくつか読んでみたら、やっぱりそうだった。「まったく攻めあがれない」点をネガティブに評価する方々もいるし、「守備が整備されつつある」点をポジティブに評価する方々もいる。ぼくのポジションは、明確に後者だ。
「サイドバックは上がりません！」と明確なメッセージを発する「４センターバック」な配置は、しかしうまくいかなかった。慣れないサイドを任された北谷が対峙するのは、ヴェルディが誇る「槍の小池」小池純輝。ここをケアするために左ＭＦ川西が下がらざるを得なくなって前半早々から５バックに。貴重な攻撃の駒をサイドのケアで消費させられてしまった。
そんな中、ライザががんばってマークを外して上げたクロスにノーマークの山岸が走り込んでヘッドで叩き込んで岐阜先制。そりゃ盛り上がりますよ。でも、このまま逃げ切れるなんて強気な考えにはならなかった。
守備はがんばった。ＰＫで追いつかれ、最後は決勝点を奪われてしまったけれど、ホントにがんばった。「攻撃が出来なかった」ことをネガティブに指摘する方は「これはホームの戦い方じゃない」「こんな試合を視せられたら、観客は２度と来ない」という。ええ、その指摘は正しいと思います。でも、北野監督はそう言った批判にはこう答えそうな気がする。「でも、それ（お客さんを喜ばせることを優先したサッカー）は自分に課されたミッションじゃないから」。
この試合で見えた『北野サッカー』は、優先順位を明確に整理したものだった。「負けなければ勝ち点は獲れる」。守備を整備しないとどうなるかは、その前のアウェー・山口戦でしっかりわかった。「４点奪われても５点奪えばいい」というプランはナンセンスだ。だから、まずは守備を整備する。山口戦を終えてからの１週間は、それに費やしたのだろう。だから、攻撃は未整備のまま。そりゃそうだよね１週間しかないのだから。
ぼくは、試合を終えてメインスタンド前に戻ってきた選手を拍手で迎えた。不器用ながらもここまで戦い方を変えられる選手たち、そして監督を励まそうと思った。これは、もしかしたら『間に合う』かもしれない。（吉田鋳造）

【天皇杯】甲府 (pen.) 2-2 岐阜

●しかし、何なんでしょうね？仕事を休んで参戦したボクの代わりに、ウチの選手らが働いてくれたんでしょうかね？しかも、残業まで。東京緑戦の後に「なんとか、90 分でひとつ。」と言っていたのが選手達の耳に入ったのかもしれない（苦笑）。そのせいかどうかは確認しようもないし、する気もないが、昨季に引き続いての延長、そしてＰＫ戦。勝敗的にはドローだけど、残念ながら次戦に進むチャンスは今季も得られなかった。心配していた天候はほぼ曇り。「試合中だけ保ってくれれば問題なし。」と思っていたけど、少しだけ降ってきた雨は、逆に火照ったカラダに効果的。おかげで 120 分やり切れた。ちょうど３ヶ月前はリーグ戦での対戦だった。あの日満開だった山梨中銀スタジアムの桜を眺めながら「ウチは未だ蕾のままだなぁ。」と思ってたのが懐かしい。
残業の末のＰＫ戦敗退はキツイ結果だったし、前にも見たことがあるコーヤのごめんなさいポーズ（逆転負けの京都戦かな）もあったが、それでも帰路の時間は昨季の３分の１。しかし、そんなことより、ゴールが２本とも劇的に素晴らしかった！終了間際の同点弾は、思いっ切り競り勝っての一発。甲府の選手が抗議してたけど、アレこそ古き良きイングランドの肉弾戦をも彷彿させる魂のゴール。そして、我が目を疑った１点目。ＰＡ外からのミドルがネットを揺らした。以前からウチのＤＦが狙い放ったミドルは、素晴らしい勢いながら枠を外し続けていたが、遂に、ついに、だ。ソレが『17 番』の一撃だったのは殊更に印象深い。
（後日、映像を見返したら『ミドル』というより「超絶ロング」だった。これからも、長良川でもあんなのが見たい。その瞬間のスタジアムを想像すると、カラダが震える。あのシュートをナマで見た岐阜サポが 30 人そこそこというのは、ホントにもったいないことだ、と。）
とにかく、コレでやることは、いっそう明確になった。中２日のアウェイ連戦はキツイが、昨季よりはマシかな？ターンオーバーもできた。天気も回復傾向。待ってろよ、福岡！
（ぐん、）

【第 21 節】福岡 1-3 岐阜

●22 位・岐阜と 21 位・福岡との“裏・天王山”、いわゆる“６ポイントマッチ”。両チームともシーズン途中で監督交代後、リーグ戦未勝利。お互いに絶対に負けられない一戦。
天皇杯２回戦では甲府にＰＫ戦で惜しくも敗れたものの、手応えを掴んだであろう岐阜に対し、鹿児島を降して勢いを得たであろう福岡。我慢比べの試合展開になるかと思っていたけれど、良い意味で僕の予想は裏切られました（笑）。前半 10 分、＃37 市丸瑞希からの縦パスを受けた＃５川西翔太がターンして突っかけて、いきなりミドルレンジで右足を振り抜くと、福岡ゴールの左上サイドネットを揺らす先制ゴール！…でも、反対側のゴール裏から見てた僕は、あまりにプレーが早過ぎて、最初何が起きたのか分からなかったことを告白します（苦笑）。それほど、凄いゴールでした。ＧＫが一歩も動けなかったもんなぁ……。そして、低迷している福岡が相手ということもあって、岐阜の２ラインブロック（で良いのかな？）もカウンター攻撃も、前節・東京Ｖ戦よりも機能する。１週間でここまで仕上げてくる北野監督、恐るべし…というか、讃岐の時って、こんなに強固なブロック作ってたっけ？現時点でだが「Ｊ２最弱」と称される岐阜の練習環境ですら「天国だ」と言ってのける北野監督、今までどんな環境だったんでしょう……（苦笑）。
そして、福岡はボールを保持するものの、岐阜の守備ブロックを攻略できずに後ろでボールを回す時間が続く。……ええ、なんだか見慣れた光景ですね（苦笑）。「持たせている」って、こういう感覚なのかぁ……と思っていたら、前半のうちに再び歓喜の瞬間が。＃５川西がキープ→＃10 ライザが反転して抜け出してクロス→ニアに走り込んだ＃11 前田遼一がファーにヘッドを決めて２点目！これもまた、ゴラッソでした。前半で２点リードって……いつ以来？調べてみたら、多分２年前の第 11 節・群馬戦以来だわ（苦笑）。その後の＃２阿部正紀と＃３竹田忠嗣の“ツインシュート”は、惜しくもＧＫに阻まれ、３点目ならず。
このまま試合が終わってくれれば……とも思ったけれど、後半に福岡は＃15 森本貴幸を投入して、前節で東京Ｖがそうしたように、中央での打開を図るが、東京Ｖよりは圧力の少ない福岡の攻撃に対し、１週間でより鍛えられたであろう岐阜の守備陣形は崩れない。だけど、何度もクロスの砲火を浴びていれば、徐々にその精度は上がっていき、あるいは偶然に決定機が生まれてしまう。失点のシーンは正にそれで、ゴール前で跳ね返したはずのボールが相手選手の目の前にきて、それを振り抜いたら岐阜の選手の間をすり抜けてしまい、ネットを揺らしてしまった。残りあと５分、１点差に追いついて一気に熱量が上がるアウェイ・レベスタ。僕の脳裏にはイヤなシーンが再生されたけれど、今回は違った。その後の決定機にも岐阜の選手たちは身体を投げ出してゴールを死守すると、前がかりになった福岡の隙を突いてカウンター、これを＃５川西が決めてトドメの３点目！少し前に、ＳＮＳで大分サポさんが「困った時は川西翔太」って呟いていたし（笑）、ウチもやられているイメージが強い選手。味方だとこれほど頼れる選手だとは……クロスバーを叩いたＦＫも惜しかったし、これからもゴール量産お願いいたします！
８試合ぶりの、しかも“裏・天王山”を制した非常に価値ある勝利。だけど、この日の福岡には＃10 城後寿も＃８鈴木惇も＃17 松田力もいなかったし、＃16 石津大介は前半すぐに負傷交替。彼らが出場していたら、結果は違ったものになっていたかもしれない。反省点はしっかりと修正して、今節も勝利を！（ささたく）
●何度でも言いますが、七夕の福岡はサイコーッでした！
まぁ、正確には『七夕の前日』ですけどね。なんといっても、このスタジアムでは 10 年ぶりの勝利ですよ、勝ち点３ですよ！これまではアディショナルタイムに失点したり、理不尽な判定でゴールを奪われたりと散々な目にあわされ続けてきたレベスタでの、この結果。これが舞い上がらずにはいられましょうか？しかも、攻め込まれて、あわや……の場面からのカウンター炸裂ですよ？弾け飛ばないワケがない……ごめんなさい！ウソです。一点差に詰め寄られたところでタイムリミット。約束のある次の場所に移動するため、川西のカウンターはタクシーの中でのダ・ゾーンでした（苦笑）思いっきり後悔したけど、試合前から２点差でリードしてたら後半 40 分に引き上げ。そう決めてたからねぇ。仕方ないよ。勝ったから、全て良し！負けた試合は全部この目で見届けたい。イザという時には声を掛けたい。逆に、勝ってくれたら、それだけでいい。喜ぶのはどこでもできるから。でもね。やっぱり最後まで見届けなきゃね。改めて、そう思った福岡の夜でした。クヤシー！
しかし、だ。どうよ？川西。後出しみたいだけど、シーズン前から仲間内では言ってたんですよ。「フロント、グッジョブ！」って。彼にはこれまで随分とヒドイ目に遭わされた印象がある。青い方の大阪の時も大分の時も。なにしろ、前から中盤底まで、サイドもできる有能な人材。ナゼ、大分が貸してくれたのかがわからない。コーヤの時もそうだったな。ウチが好きなのか？大分。ホント、今まで使われなかったのが不思議な存在と思ってたワケですよ。
しかし、リアリストだわ、北野さん。前節の長良川で、川西を小池のマークに付けといて、前半だけで替えた時はどうなることかと思ったけど。ミズキのパスも良かったとはいえ、アレを引き出す動きとシュートの技術。２点目も起点になった上にアノ３点目。ホント、なんで今まで……、そうか！今まで温存してたんだな？航汰もスゴク効いてたし、移籍可能

期間前に戦力増強！そうか、コレが夏の補強か（笑）。
最終ラインを始め、全員守備も板についてきた感じ。タクミは阿部ちゃんと替わって？途中から右に入って、さらに良くなった気がする。（最初っから右でしたっけ？）カイケンも今季一番の出来だったんじゃないかな？特に、ラストのパスカットというかボール奪取。最終盤であの判断力は素晴らしい。で、ソレをいち早く拾って川西に出したタクミのパスの美しさったら、もうね。ファンタスティック。コレを決めなかったら自陣へ戻って来れない的なヤツ。そんな見事なパスをしっかりアシストにしてあげた川西はイケメン！
あー、それから忘れちゃいけないＦＫ。これも後出しみたいになるけど、ライザが倒された時「赤だろ！決定機の阻止だろ？」って叫んでたんだけど、スグに「あ、ココはミズキのＦＫだ……。」って思い直したね。決まりそうな予感してたんだけどなぁ。判定にケチつけてた分、念が足りなかったか。まぁ、実際蹴ったのは川西ってことに気がついてない時点で問題外です、ハイ。
しかし、こうしてみると今いる人材を有効活用したサッカーをすれば、なんとかなりそうな気がしてきませんか？能力で劣る集団が勝つために練るのが戦術。けど、今ある人材に合わなければ意味があるとは言えないのかもしれない。そういう観点からすると、１年目のメンバーに上乗せさせた状態で見てみたかった……と繰り返し思う大木サッカー。まぁ、それは言っても詮ないことではある。
それでも、戦力は増強するに越したことはないけどさ。ミズキが活かせて、カイケンとタクミがさらに成長したら……などと妄想は膨らんで止まることを知らず。
ただし、この試合を『完勝』とは言いませんよ、ゼッタイに（笑）。『隙なし』なんて、とてもとても。カラダ張ってなきゃ、流れがどうなっていたか。とにかく、希望は見えたし、【６ポイント・マッチ】を制したことは賞賛に値するというよりほかはありません。
この後も千葉、そして鹿児島と近い順位の相手が続きます。この２年と違い、夏場に巻き返せるか、どうか。いや、巻き返せなかったら降格するだけなんでね（毒）。福岡とはまた１か月後に対戦。返り討ちにしたいけど、とにかく、まずは降格圏からの脱出。アゲていかなきゃ、ね。（ぐん、）
●勝ち点６マッチ。ヘンテコな表現だけど、残留争いにおいては必須のタームなんで、説明します。要するに『残留争いを演じる２チームの直接対決』のこと。実際のところ、その試合に勝ったからといって負けた側の勝ち点を３だけ削れるわけではないので勝ち点３を得るだけなのだけど、「勝った側は勝ち点３を得て、負けた側が勝ち点３を得るのを自力で阻止できる」ために、３＋３で『勝ち点６マッチ』と形容する。
岐阜では、2013 年９月 22 日に行われた第 34 節、これまでで唯一のＪ２・大垣浅中開催のガイナーレ鳥取戦がそれだった。最下位の岐阜と、同じ勝ち点ながら得失点差でドベ２の鳥取の直接対決。結果、２－１で岐阜が勝利し、最終的にも 21 位でＪ２残留を果たし、最下位で終えた鳥取は讃岐との入替戦も落としてＪ３に降格、まだＪ２に復帰できていない。
しかし、今回の福岡 vs 岐阜を『勝ち点６マッチ』と呼ぶのは、岐阜側の一方的な事情だ。まず、前半戦の段階で『勝ち点６マッチ』になってしまうという戦績。もし、この試合で岐阜が負け、同じ節で行われた試合で栃木が琉球に勝っていたら、最下位・岐阜と 21 位・福岡や残留圏 20 位・栃木の勝ち点差は８に開いていた。いくらあと 21 試合あるといっても、勝ち点８差は３つ多く勝たないとひっくり返せない。ほぼ絶望と言っていいシーズンになりかねなかった。一方の福岡は、岐阜戦を落としたとしても、残留圏と著しく離れてしまってさあ大変というわけでもない。
そんな「片思い」の『勝ち点６マッチ』は、岐阜が勝つならこのシナリオしかないな、という展開になった。前節・東京Ｖで精密爆撃に晒されてしまった左サイドバックは甲斐を配置。これで川西はちゃんと左２列目としてしっかり攻撃に参加出来た。参加した結果が、２ゴール＆１サブアシスト。ぼくは川西がサブアシストした前田のゴールが好きだ。相手の圧力を川西がカラダでしっかり耐えきってライザへパス、ライザは綺麗なターンで相手ＤＦを振り切ると一瞬だけ中を視て前田のポジションを確認して速いクロスを上げると、前田のヘディングシュートは、相手ＧＫの届かないファーのサイドネット方向に。いやあ、技術だわ。ホントに岐阜の若い選手や少年少女サッカー選手たちは、前田のヘディング技術を見て学んでほしい。
試合も終了近くになって岐阜の選手も動けなくなってきたら、システムを 5-3-2 に替え、さらに 5-4-1 に替え。とにかく守り切る。でも、ぼくは不安だった。このまま２－０で逃げ切れればいいけれど、１点でも返されたらすぐに同点にされそう、さらには逆転されそうだ、と。それでも、その 5-4-1 の１トップに川西を置いたのが、最後の最後にしっかりと効いた。ただ引くだけではない甲斐の守備。流れたボールを一気に前線に出した藤谷、そして川西のフィニッシュ。大木サッカーではあまり主戦を張れなかった３人によるダメ押しゴール。ようやく「この試合、獲った！」と思ったよ。
水曜に天皇杯があったので選手には疲れもあったかと思う。「こんな大事な試合の前に天皇杯だなんて……」と思っていたのだけど、逆でしたね。いまの岐阜は、チームの『リストラ』の真っ最中。しかも、試合をしながらリストラする、強いて言うなら「ＯＪＴ（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）」ならぬ「ＯＪＲ（オン・ザ・ジョブ・リストラクチャリング）」。ここで言う『リストラ』とは、日本語になってしまった「クビ切り」という意味ではない、本来の意味の「リストラクチャリング（再構築）」だ。
だから、試合はあった方がいい。山口戦はとりあえずいまのままでやってみる→惨敗。ヴェルディ戦は守備を立て直してみる→試合にはなった。天皇杯・甲府戦はもう少し能動的にやってみる→延長ＰＫまで行った。そして福岡戦→守備はほぼほぼ固まってきたから手数少なく結果を出せるサッカーに→勝利。なんか、こわいくらいに順調だ。もちろん、まだ「残留争いに残っていい」権利を手に入れたに過ぎない。それはわかっているけれど、もしかしたらこれは『間に合う』かもしれないという思いは、強くなっていく一方だ。（吉田鋳造）